

Trial & Error

No.234

November - December 2003

〈レポート〉

合鴨訪問団、ベトナムへ行く

〈プロジェクトの現場から〉

カンボジア／イラク

〈イベント報告〉

第3回東京アフリカ開発会議 [TICAD III]



未来を子どもたちの絵に託して

『南北 코리아 と日本のともだち展』

特集

今なぜ北朝鮮人道支援なのか

(北朝鮮) 見つめる (写真: 谷本美加)



■敵視する関係を正したい

熊岡 JVCと北朝鮮との関わりを、私的体験も含めてお話しすると、一九九五年、日本でいえば敗戦五十年、朝鮮半島、中国の人たちから見れば解放五十年の年に国際会議が韓国で開催され、私も呼ばれました。「アジア太平洋の市民社会形成を考へる」という大きなテーマで開かれた集まりで、フィリピン、タイ、スリランカなど多くの国からNGOが来ていました。八月十五日に最終のミーティングがあったのですが、そのとき韓国の女性団体から日本を名指しで批判したいという提案が出たりして、日本からのグループが孤立するしんどい思いをしたことがあります。

この時期、韓国でも大雨だったのですが、北朝鮮は大洪水に見舞われたというのを後で知りました。その後、タイ・カンボジア国境で一緒に働いたことのあるWFP(世界食糧計画)の人が食糧支援で北朝鮮に入り、そのまま事務所を構えた。北朝鮮が初めて国連および国際社会に支援を求めたのです。JVCもピースポート、農協青年部、青年団協議会、リサイクル運動市民の会と組んで米支援に動きました。九六年八月には初めて北朝鮮の地を踏みました。

私の思いは、もちろん食糧難に対する緊急救援をしなければというこ

人道支援なのか

人と人をつなぐことで、「これから」が生まれる



■託児所に太陽光パネルを取りつける (2002年11月撮影、テガン協同農場にて)

あの平壤宣言から1年、前に進むかと思えた歴史が後戻りしている。そんななかで、しっかりとこの先を見つめ、小さいながらも地道に人道支援を行ない、人と人のつながりをつくろうと歩むNGO・市民の動きがある。その活動にける思いを、平和団体ピースポートで活動する在日コリアン青年連合(KEY)東京の琴玲夏(クム・リョンハ)さんとJVCの熊岡路矢代表に話してもらった。(編集部)

とでしたが、同時にこれだけ近い国でこんなに関係が切れているのは非常に不自然であり、何かチャンネルを持つべきということもありました。日本ではちょっとした世論の動き方で朝鮮籍の人へのバッシングが広がる可能性があり、そういうことに対抗できる市民のネットワークが必要ではないか、ということも当時ばくぜんですが、感じていました。こんな思いも含め、人道支援という形で北朝鮮の人々との関係を始めたわけです。

私は八〇年代にベトナム、カンボジアといった、外に対して閉じていた国で働いた経験もあるのですが、北朝鮮での活動はそこ比べても格段に難しいなと思いました。体制が強固でよそ者には本当の事情がなかなかわからないことと、日本人であることのハンディキャップです。日本人総体への批判が強い。もちろんこれは、歴史的な経緯からくるものですし、敵視は相乗的・相互的なものでもあるのですが、そういう難しさがあります。

■人々の顔が見えない

琴 北朝鮮への人道支援をやりながらいつも複雑な思いをしています。私は高校までは朝鮮学校だったので、大学は別のところに進んで、三十歳になった五年前に韓国籍に切り

替えました。私のこういう歩みのなかでいつも強く感じるのは、国と国との関係が緊張すると、それがそのまま私自身に降りかかってくるということ。例えば朝鮮学校に通っている頃などですね。日本あるいは日本人が北朝鮮をどれだけ敵視しているか、ということ子どもときから肌身で感じてしまっているのです。そうすると、その理不尽さに対する反発も高まります。不当な扱いを受けているから、その国を守ろうといったような意識が十代の頃はあったような気がします。大学に入ってからは違う世界を知ることによって国家を相対的に見られるようになったのですが。

九〇年代後半、北朝鮮が食糧難だということが伝えられて、やはりどうにかしたいと思いました。これだけ近い国なのに、これだけ日本人が敵視していて、人が死のうが気にも留めないということに対する反発がある一方で、支援は今の北朝鮮の体制を助けることになるのではないかという批判に、ゆれてしまうという複雑な思いもありました。

そんなときに、本当にいい出会いがあったのです。日本人と在日コリアンと韓国の青年団体でユースフォーラムという催しがあり、九八年に初めて韓国に行きました。そのとき北朝鮮人道支援をしている青年



浄土会という韓国の青年グループと知り合いました。同じ年、浄土会の法輪という和尚さんが来日し、人道支援の大切さを語られた。目からうろこが落ちる思いでした。

私自身も日本に育っていて例外ではないのですが、日本には人道支援とか人道主義ということは根付いていないと思うのです。支援といつてもすべて政治とのバスター、取り引きで考えるのが当たり前だと、実は私も知らず知らずのうちにそう考えていたことを気付かせていただいた。十人いて三人分しか食べ物がなところがあったら、まず食糧を届けることではないのかと、非常に明快に語られたですね。私の価値観は一八〇度変わりました。

熊岡 同時に人道支援には別の側面もあることは間違いないところで。この世界では人道支援といえどもなんらかの政治性を持つ。結果的に特定の体制を助けるという意味での政治性もあれば、アメリカ、日本、ヨーロッパなどの国益が「人道」の看板の陰に隠れていたりもします。人道支援が持つべき純粋さの一方で、避けられない政治性が同時についてまわることには常に注意しています。

私たちは人道的観点という場合、体制と人々を極力分けて考えようとするわけですが、極端な場合にはそれができないというジレンマが、例

特集

今なぜ北朝鮮

KEY 東京副委員長

JVC 代表

対談

琴 玲夏 × 熊岡 路矢



■支援した米を配給する (2003年8月撮影、江原道にて)

えば北朝鮮でもあります。

具体的な人々の意見や表情がとらえられない。一番困っている地域(北東部、山間部など)の人に出会えていないので、自信が持てない。小規模ではあっても支援を続けていきたいのですが、現状把握すらできないということがある。これが、これまでJVCが関わり、ある程度人道支援として成功させてきたカンボジアやエチオピアなどとの違いです。

■憎悪の構造のなか、拉致が。

琴 私たちの場合、まず在日コリアンに呼びかけようと、九八年、募金箱とピラを持って訪ねたのです。そうしたらみんな本当に冷淡なのですね。総聯系※注一系に行くのと、そういうことは組織でやっているからと言われし、民団※注二系※注三の人は「関係ないよ」といった調子。人が飢え死んでいるのにここまで分断思考が染み付いてしまったのかと、恥ずかしく情けなかった。

そんな経過を経て、韓国のNGOとともに活動を始め、食糧支援だけではなく「南北オリニオツケドム」という、南北コリアの子どもたちが肩を組める未来をつくらうとする、すばらしい活動と出会うことができました。朝鮮戦争によって三百万人の血が流れ、肉親が死に、あるいは一千万人が生き別れ、ぬぐいがたい

傷を負って南北対立のなかで生きてきた韓国社会が、それでも北朝鮮に人道支援をと言っている。そこに学ばなければいけないと痛烈に感じました。

熊岡 私たちは物事を見るとき、相手の立場にも立ってみようといつも考えています。一例ですが、平壤にいたとき、米韓共同軍事演習があった。それを平壤にいて見ると、圧倒的に強い相手に取り囲まれている恐怖感や孤立感がある程度わかりました。現地ですのなかなどで個人的に北朝鮮の人々と話をする機会がありますが、植民地時代に家族が引き裂かれたことなど、日本人であることの責任を強く感じます。謝つてすむ問題ではないのですが、日本から被害を受けた人たちが大勢いるわけですから、拉致事件も非常に大きな問題とは思いますが、別個に大きな問題が両国の間に未解決のまま残っているとわらざるをえません。

琴 昨年九月十七日の平壤宣言から一年が経とうとしているのですが、私の人生のなかで最悪の一年間でした。仲間内で、荷物をまとめてどこかに移住しようかという冗談が出たくらいです。日本の植民地支配があつて、その後国交正常化をしてい

※注一 在日本朝鮮人総聯合会
※注二 在日本大韓民国国民



ないということ自体が異常なことです。だからこそ拉致も起きる。戦争や侵略、それがもたらす憎悪にけりがついていないのです。人を人とも思わない暴力装置がこの地域にはある。この百年解けない憎悪の構造のなかで、北朝鮮による日本人拉致も生まれた。皆同じ構造にはまっています。問題解決の責任は両国の政府にあります。

日朝首脳会談が日朝国交樹立の一歩になるかと期待したのですが、逆走でした。永遠の断絶宣言かというくらい、日本の反応の仕方はすさまじいですね。

■流れを客観的にとらえる

熊岡 同時に朝鮮戦争から五十年も経つのに、いまだ「休戦」でしかない。これも大変異常なことだと思っ

たのです。かたや戦争状態が続き、日朝では憎悪の連鎖に終止符が打てない。朝鮮戦争の終了や、日朝関係の正常化がもっと早く進んでいけば、拉致事件もなかったかもしれない。二〇〇〇年五月に南北の首脳が会谈しました。その後北朝鮮に行く機会があったのですが、農場の人など一般の人たちが、以前の緊張感と異なり、とてもリラックスした表情でいたのが印象的でした。この会谈を通して少なくとも戦争で問題を解決しようとはしないということが南北

の人々に伝わったのだと感じました。

日朝の場合も、両国指導者が会って正常化への期待もあったし、当初は評価も高かった。これは多くの日本人の気持ちでもあったと思うのです。それがいつしか拉致問題がすべてというような展開になった。その背景として、事件自体の衝撃の大きさもありますが、同時にこの事件を契機にして、日本のなかに潜在していた攻撃的な意識や差別意識などが噴き出した、という側面があったと思います。メディアにも問題が



琴 玲夏 (クム・リョンハ)

東京生まれ、東京育ちの在日コリアン3世。早稲田大学在学中より在日コリアン運動に関わり、94年に在日コリアン青年連合(KEY、旧称=在日韓国青年連合)東京を立ち上げる。現在はKEY東京副委員長を担うかたわら、2002年11月よりNGOピースポートにスタッフとして勤める。

10人いて3人分しか食べ物がないとしたら、まず届けること。

あります。日本では例えば皇室報道がタブーなのですが、タブーがあると次々つくられる。報道関係者に聞いても、拉致事件・被害者家族の報道については、当初代表取材のみで自由がなく、複数の見方が許されない形がつくられてしまった。そして日本では議会もメディアも、「大政翼賛会」的にひとつの方向にいつてしまい、その結果「世論」も一色になる傾向がある。そこにならなくて楔(くさび)を打ち、客観的にバランスを取って見ていく流れをつくるかというのが、人道支援ともリンクするJVC

Cの役割だと思っています。琴 どういう形でそれを進めておられるのですか。

熊岡 JVCは朝鮮問題の専門ではないという立場で、逆にカンボジアやエチオピアの例をとりながら、問題を広い国際的な枠で考えるという視点を提示したり、人道や人道援助という考え方を訴えたりということが一つですね。

それと、日朝だけで向き合っても膠着状態に陥りがちな難しい状況のなかで、「南北オリニエツケドム」などの韓国の市民団体の見方を学び、国際会議を呼びかけて欧米や国連機関などの人々から別の視点を育て、袋小路に入った問題を解くことはできないか、と追求する。これもJVCの役割だと思っています。

琴 韓国、日本、北朝鮮の子どもの絵の交換と展示は、今言われたことでも大きな意味を持っていますね。

熊岡 そうですね。サダム・フセインのイラクもそうだったのですが、最高指導者の「看板」の背後の何千万人の人々が一色にとらえられ、まとめて否定されようとするときに、そうではなくて、さまざまな声と表情の人々や子どもたちがいて、こういう思いでこういう絵を描いているということをもっと多くの人に知ってもらって、単細胞的に宣伝する「悪の枢軸」的な考え方を直したい、そう



未来を子どもたちの絵に託して

『南北 코리아 と日本のともだち展』

東京事務所・ 코리아 事業担当 寺西 澄子

平壤の夏は短い。けれども今年の北朝鮮は、中途半端に終わってしまった日本の八月と違って、夏らしい夏となったようだ。私たちの到着する前には夕立のような大雨が降ったのだと、案内員が教えてくれた。雨に洗われた街並みや街路樹の緑が、夏の北朝鮮を初めて訪問する私の目に清々しく、新鮮に映った。

三年目を迎えた『南北 코리아 と日本のともだち展』（以下『ともだち展』）。平壤展開催のため、実行委員会のメンバーは、東京の朝鮮学校に通う子どもたち四名、先生二名とともに、この八月末に北朝鮮を訪問した。滞在中、平壤市ルンラ小学校での絵画展示会や交流会のほか、平城市トクソン小学校にも訪問した。

この二つの小学校は、今年七月に東京で開催した『ともだち展』に絵を出品してくれている。今回、絵を描いた子どもたちに会い、参加賞や展示会場で集まったメッセージを直接手渡すことができた。真剣な顔でメッセージを読む子、ほかの人のものを後ろからのぞき込む子、袋から何度も取り出して満足げに見なおす子…。『ともだち展』を始めた二年前は、このようなことが可能になるとは想像もできなかった。経験のない北朝鮮でどうやって展示し、子どもたちの手に直接メッセージを届けるか。日本でどのような子どもたちに

参加してもらおうか。いったいどのような人たちと想いを共有し、絵画展をつくりあげればいいのか。模索を続けながらも、一歩ずつ前進してきた『ともだち展』の三年間、そしてそれ以前からの絵画交流の積み重ねを振り返りたい。

■絵を通して

코리아・日本の子どもが出会う

○一年六月に東京で始まった『ともだち展』は、これまでに東京で三回、ソウルで二回、平壤で二回開催されている。それぞれの地域の事情によって形態は若干異なるが、北朝鮮・韓国・日本に住む子どもたちの絵を展示するのが特色だ。ただ「外国の子どもたちの絵」を見るのではなく、自分たちも参加する。そうすることで、子どもたちは、互いを知らないことから生まれる偏見や不信ではなく、共通点を見つけて親近感を持つことができる。これまで、対話の機会があまりにも少なかった北東アジア地域において、ささやかではあるが「出合いの場」をつくりたいというのが、主催者の願いだ。

「KOREA 子どもキャンペーン」が『ともだち展』の原点となる絵画交流を始めたのは、九九年のことである。同キャンペーンは、九六年より北朝鮮への人道支援に取り組んできたが、日本の人々にとって「よく

わからない国」でしかない北朝鮮に生きる人々のことをどう伝えるかが、大きな課題だった。韓国のNGOが、南北の子どもたちの絵手紙（自画像とメッセージ）を交換していたことにヒントを得て、日朝の子どもたちの絵を交換し、日本で展示会をしたのが絵画交流の始まりである。

訝しがる北朝鮮側の受け入れ団体や小学校に「なぜ、子どもたちの絵

■上：北朝鮮・韓国・日本の子どもたちが描いた絵
(北朝鮮：左4枚、韓国：中3枚、日本：右3枚)
■下：絵を描いてくれたルンラ小学校の女の子



が必要か」を説明することから始まり、「どんな子でも（絵が上手でなくても）参加できる」ことを話し、絵を描いた子どもたちに直接会う…日本では何でもないように思えるこれらのことを、北朝鮮を訪問するたびに話し、日本からも何度か絵を持参し、やっと下地ができてきた。初めて絵を手渡されたときはお手本のよ



「KOREA こどもキャンペーン」の
北朝鮮関連年表

1995年

8月 北朝鮮で大雨、洪水の大被害（国土の75%）。国連機関よりアピールが届く

1996年

6月 「NORTH KOREA 水害支援キャンペーン」設立（JA全国農協青年組織協議会、日本青年団協議会、日本リサイクル運動市民の会、ピースポート、日本国際ボランティアセンター）
8月 現地訪問：新潟港より、米61トンを持参。江原道通川、高城ほかで配布

1997年

3月 WFP 経由で食用油を支援（生活クラブ生協）
7月 「北朝鮮こども救援キャンペーン」立ち上げ（日本青年団協議会、ピースポート、地球の木、NGO ラブアンドピース、日本国際ボランティアセンター）
8月 WFP 経由で栄養食を支援
10月 WFP 経由で小麦を支援
11月 現地訪問：平安南道肅川、順川（協同農場、幼稚園、託児所、配給所）、平壤（WFP 平壤事務所）

1998年

2月 「一食キャンペーン」参加（韓国NGOの呼びかけにより、世界同時に一食を抜き、北朝鮮の飢餓に対する食糧支援をアピールする）
4月 WFP 経由で小麦を支援
7月 「北朝鮮こども救援キャンペーン'98」立ち上げ（新たにアユース仏教国際ネットワークが参加）
12月 現地訪問：黄海北道銀波、平安南道順川（協同農場、幼稚園、託児所、孤児院）、平壤（育児院、WFP事務所）

1999年

2月 「北朝鮮人道支援日韓 NGO フォーラム」実行委員会参加
3月 120万円支援（WFP 経由）
4月 現地訪問（有機農業家が参加）：黄海北道銀波、平安南道順川
7月 「いつかは出会い共に生きる未来のともだち～北朝鮮のこどもたち写真・絵画展」開催
9月 現地訪問（有機農業家を中心）：黄海北道銀波、テガン協同農場、平壤市（ルンラ人民学校など）

2000年

3月 現地訪問：黄海北道銀波、テガン協同農場、平壤市（ルンラ人民学校、WFP事務所）
5月 WFP 経由で栄養食を支援
7月 「DPRK（北朝鮮）人道支援国際 NGO 会議」実行委員会参加
9月 「DPRK（北朝鮮）人道支援ネットワークグループ」参加（事務局担当）
11月 食用油、砂糖を支援

2001年

2月 食用油 1トン、砂糖 700キログラム支援（万景峰号）
3月 「しあわせ宅配便」（小学生からの文房具寄付）を受け付け
3月 現地訪問：テガン協同農場、黄海北道銀波、平安南道大同、平壤（ルンラ人民学校、WFP事務所）
6月 「南北 코리아 と日本のともだち展～あなたのことを教えて」実行委員会参加
7月 現地訪問：テガン協同農場（太陽光発電パネル取り付け）
11月 東海岸（元山市、安辺郡、通川郡）洪水被害支援

2002年

4月 「しあわせ宅配便」プロジェクト実施（小学生からの文房具寄付を受け付け）
4月 現地訪問：テガン協同農場、平壤（ルンラ人民学校、WFP事務所、大同江区域病院）
9月 「2002 南北 코리아 と日本のともだち展～わたしのことばくのこと」実行委員会参加
11月 現地訪問：テガン協同農場（太陽光発電パネル取り付け）、平壤（ルンラ小学校、WFP事務所）、江原道元山市、安辺郡
12月 東海岸（安辺郡、通川郡）洪水被害支援

2003年

7月 「2003 南北 코리아 と日本のともだち展～ともだちになろう」実行委員会参加
8月 現地訪問：テガン協同農場、平壤市（ルンラ小学校）、平城市（トクソン小学校）、江原道元山市、安辺郡（託児所、幼稚園）

第に生活が垣間見えるような絵が届くようになった。美術の課外活動を参観して、絵を描いている子どもたちとその作品がしっかり結びついてきた。ルンラ小学校の校長先生は「もっと、日本の子どもたちの絵を届けてください。こうした同年齢の子どもたちが描いたものを見るのが、いちばんメッセージとして伝わるのです」と話されるようになった。

■「ルンラ仲間がいて」

こうして北朝鮮とのつながりはできてきたが、改めて『ともだち展』をしようと思ったとき、何より難しかったのは日本の参加者を集めることだった。ほとんど何のつてもないなかで、展示会場に近い絵画教室に飛び込みで参加をお願いしたり、朝

鮮学校や韓国学校などを訪ねたりして、何とか開催にこぎつけた。一年目は絵の展示だけで精一杯

だったが、翌年の東京展には韓国 NGO の協力で、韓国から九名の子どもたちが訪れ、絵だけに限らない小さな交流も始まった。しかもこの年の絵画展は、期せずして歴史的な日をはさんでの開催となった。日朝首脳会談である。平和への前進が期待されたあの日に、絶望的な報せがもたらされたとき、実行委員のなかでは「子どもたちの絵が傷つけられるかも」と中止の話も出た。けれども、会場には「それでも平和を願う人がいることを確かめに」再訪された在日コリアンや、「くじけず継続してほしい」という方こそいたが、苦情はひとつもなかった。ひとりでも

勇気付けられる人がいて、支えてくれる人がいるうちは、続ける意味があると感じた瞬間であった。

◎

昨年ソウル展に参加した朝鮮学校の生徒の言葉を紹介したい。ソウルに着いた晩「初めてのソウルの印象は？」と尋ねてみた。すると、一人がこう切り出したのだ。「みんな敵だと思っていたけど、今日会った人はみんな優しいかった」

胸を突かれた。彼がいつから「みんな敵だと思っていた」のかはわからない。けれども彼は、日本に住みながら「敵に囲まれている」と感じていたに違いない。これは朝鮮学校に通う子だけではなく、多くの在日コリアンの実感だと思う。九月十七日以降、厳しい朝鮮バッシングが続

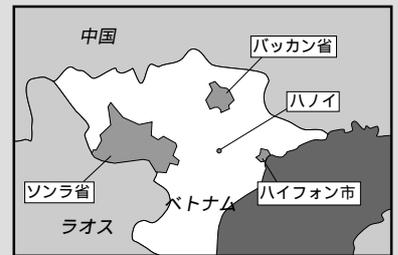
いているが、それを黙認し「むずかしそう」朝鮮問題として遠ざけようとする風潮に、失望し傷つくコリアンの人々は少なくない。これからは、遠ざけるばかりではなく、近く努力が必要ではないだろうか。互いの距離が遠くはなれていき、『ともだち展』は「ここにも仲間がいるんだよ」と伝えることができ。本当に小さな活動だが、確実に未来を志向した、「私たちにできる」北東アジアの平和づくりのひとつだ。という手応えを感じる。この動きにひとりでも多くの人が参加し、子どもたちが実際に会えるようになれば、と願わずにはられない。

「KOREA こどもキャンペーン」へのお問い合わせ
TEL: 03-3834-9808 FAX: 03-3835-0519
URL: <http://www.jacacc.or.jp/~tena/col/>

合鴨訪問団、ベトナムへ行く

JVCが合鴨水稲同時作に出会ったのは1993年。翌年から全国合鴨水稲会の協力を得て、ベトナムにアヒル（ベトナムでは合鴨ではなくアヒル）水稲同時作を伝えてきました。田んぼに放ったアヒルが害虫や雑草を食べ、丈夫な稲が育ち、土壌が改善されるだけでなく、アヒルは現金収入源にもなります。

10年目を迎えた今、今後どのようにアヒル水稲同時作に取り組むのか、見直す時に来ています。そこで8月上旬、古野隆雄さん、古野久美子さん、福永大悟さん（全国合鴨水稲会）、島村菜津さん（ニッポン東京スローフード協会）に北部ベトナムでのアヒル水稲同時作を視察していただきました。



東京事務所・ベトナム事業担当

越智 美奈

を身につければ、JVCがこれまで支援したヒナ代と比べても効率的です。

「孵卵機は七千万ドン※注1、これはヒナ千四百羽に相当する。〇一年と〇二年にJVCはこの集落に対し六千二百八十羽のヒナを提供したが、農民がヒナを孵す技術を身につけて、四台の孵卵機を貸すほうが合理的。またヒナが高ければ、買う側でなく、売る側に回ればいい。そして売りながら近隣の農民にアヒル水稲同時作を普及するといいたいだろう」。この提案は、今後集落とJVCで検討することになりました。

会合のあと、チエンリー村の招待で一行は黒タイの文化に触れました。前日から仕込んだ若竹のスープ、川魚の香草煮込み、瓜の煮物、香り豊かな野菜、蒸したもち米といった伝統料理とともに、手づくりの酒がふるまわれ、歌と踊りが繰りひろげられました。

森林科学院ソンラセンターの副所長で自身も黒タイであるムオン氏は「黒タイの世界観では、森に木があり、水があるだけでは人間は生きることができない。森には生き物がいないればならない」と語り、田んぼ

で主食の米、副食のアヒルと魚、家畜の餌にもなるアゾラ（水草）、さらに果物もつくるといってアヒル水稲同時作に強い関心を抱いています。

■近代化と補助金で変わる村

次に訪問したのは北部山岳地域にあるバクカン省のチヨドン郡ザーバーン村（〇一年と〇二年に支援、十集落、三百二十三世帯）とチヨモイ郡カオキー村（九八年から〇一年に支援、十三集落、六百二十三世帯）です。ここでもアヒル水稲同時作は行なわれていませんでした。ソンラ省と同様であるヒナ購入の資金不足とともに、アヒルの病気が理由に挙げられました。

さらなる理由として一行を暗澹たる気持ちにさせたのは、今年からバクカン省農業普及局が無料で導入した近代稲作農法でした。これは、タップザオという中国の増産品種を直播し、三日目にベトナム製のジブタという除草剤を一度撒けば終わり、というものでした。ベトナムの農業の場合、化学肥料、農薬、除草剤など、手軽な部分のみが近代化されています。一見長閑な農村風景も、化学肥料や農薬や除草剤によって急速に変

■伝統が息づく村で

最初に訪れたのは、北西山岳部に位置するソンラ省のソンラ町チエンシン村（ソンラ集落三十一世帯とトアンチャウ郡チエンリー村二十二集落、千七百七十八世帯）です。両集落は山間の盆地にある黒タイ民族の集落で、伝統的な高床式の家が緑のなかに点在し、その床下はアヒルや鶏、水牛、山羊など家畜の寝場所になっています。家の周りには果樹だけでなく、生活に必要なさまざまな木を植えています。既婚の女性たちは民族衣装をまとい、大きなお団子にまとめた髪を、刺繍で彩った長い布

で飾っています。ここでは二〇〇一年と〇二年にJVCが支援してアヒル水稲同時作を始めましたが、今年実践している農家はありません。その原因を探るため、合鴨農法を指導してきた女性たちと会合を持ちました。

まず古野隆雄さんがスライドを使って話をし、参加した女性たちは何十枚も熱心にノートをとりました。その後は活発な意見交換が行なわれ、アヒルの放し飼いで田ネズミの被害が少なくなかったこと、雑草、害虫、病気が無いこと、農薬や化学肥料や除草剤を使用していないので、その分の支出が必要なかっ

たこと、収量が一〇%増収したことなど、アヒル水稲同時作そのものの評価は高いことがわかりました。また、アヒルの売上げは米の売上げの五〇%に相当し、不足した場合の米の購入費として十分だそうです。

ではなぜ農民が実践できないかというと、農民がヒナを用意しなければならぬ時期が、ちょうど現金が底をつく時期にあたり、ヒナの入手が難しいからでした。

これに対して古野隆雄さんから、ヒナを購入するのではなく、集落で孵卵機を購入して孵化場を運営する提案がありました。もし農民がヒナを孵す技術

化しているのです。

翌日はJVCのパートナーであるVACVINA^{※注一}のバツカンと会合を持ちました。副代表フォンさんやアヒル水稲同時作普及を担当したトゥイさんは「十年前のバツカンは、木、魚、アヒル、果樹など多様な農業環境があった。農業普及局は近代農法を勧めるが、自分たちはアヒル水稲同時作などの持続的な農業を取り戻したい」と語り、その言葉に一行は勇気付けられました。

■進む市場経済化のなかで

最後に訪れたのは、九四年に試験田を設け、最も普及に力を注いだハイフォン市です。ここでは、二〇〇〇年にJVCが支援を終了した後、五百世帯以上がアヒル水稲同時作を続けています。見学した農家の田んぼは家の裏に広がり、アヒルは家のすぐ裏にある小路を越えて「出勤」^{※注二}します。雑草も害虫も病気もなく、アヒル水稲同時作の特徴がよく出た、素晴らしい稲が育っていました。

九四年に試験田を設け、JVCとともにアヒル水稲同時作を普及してきたVACVINAハイフォンのニューさんは、今で

はベトナムのアヒル水稲同時作の第一人者です。

現在、ニューさんはアヒル米（アヒル水稲同時作でつくった米の流通販売に取り組んでいます。何人かが出資して「安全な米」の精米工場を立ち上げ、包装を工夫し、宣伝をしています。しかし、一世帯の田んぼは二十五アールで、そのうち売れる米は六アール分^{※注三}に過ぎず、扱う米の量に対して、その投資は過剰でした。

流通の仕事から合鴨農家に転身した福永さんは、マーケティングの必要性を説きます。「ハード面で日本の真似をしても売れない。ベトナムでの安全

な食品に対するニーズ、米の実態流通におけるアヒル米の可能性の検証、外国企業などへの聞き込みなどが必要だし、消費者の安全性、環境、化学物質に対する意識の高揚がないと苦しいだろう。九九年頃から国レベルで農薬や化学肥料の多用批判キャンペーンが始まっているというし、ハイフォンという大都市の地域性、ハノイへの交通の至便性を考えれば、近い将来可能性は出てくるのではないか」

■アヒル水稲同時作から見た日本とのつながり

古野久美子さんはハイフォンの田んぼで少年に話しかけまし

た。

「ここに何がいるの？」
「魚、エビ、カニだよ」
「それを取って帰ると、お母さんはなんて言うの？」
「良く取ってきたね。これで晩ご飯のおかずをつくらうね」

これを聞いた古野隆雄さんは嬉しくなりました。ベトナムではすでに、化学肥料や農薬、除草剤が使われていますが、基盤整備がされていないので、水路や田んぼにまだある程度魚が住んでいるのです。「まだ間に合う、今こそ、田んぼの魚を守り、再生させる地域ぐるみの活動が求められているのだ」と感じたそうです。

古野久美子さんは、こう言うています。

「無償でモノを与えるやり方には限界がある。短期間に実績を挙げることができたとしてもそれは見せかけのもの。技術の真意を伝えることが大切であり、本当に良い技術は交流のなかでゆっくりと育ち広がるのではないだろうか。考える農民や考える指導者が育つてこそ、地域が良くなる」

島村さんは次のように締めくくりました。

「相変わらず飽食の日本は加工食品や冷凍食品の原料、家畜の餌のほとんどを海外に依存している。ベトナムのエビ養殖が地元の環境を荒らしているのはほんの一例に過ぎない。合鴨農法がたなくベトナムと日本の小さな関係は、実は日本がアジアで孤立しないための新しい関係を模索する一歩なのだと思う」

※注一 行政単位は「省・特別市」「町・郡」「村」村は複数の集落からなる。

※注二 千トンは約九担。

※注三 ベトナムの伝統的な複合農業（VACVINA）を普及する大衆団体。

※注四 A.C.農法は二十四時間田んぼに合鴨がいますが、アヒルをよく食べるベトナムでは盗まれる恐れがあるので、昼間だけアヒルを田んぼに放します。

※注五 ハイフォンでは米は二期作で、収量は一ヘクタールあたり十トン。



■ハイフォン市の試験田にて。左二番目からニューさん（VACVINAハイフォン）、フィンさん（元JVCスタッフ）、伊能まゆ（JVCベトナム事務所スタッフ）（写真：島村菜津さん、2003年8月撮影）



■VACVINAバツカンと。手前左から古野隆雄さん、古野久美子さん、福永大悟さん（写真：島村菜津さん、2003年8月撮影）

カンボジア

住人の生活を奪う 森林伐採

齋藤 香里

コンポントム県サンダン郡にあるトゥムリンに行ってきた。トゥムリンは大きな森のなかにある八つの村からなる集合村で、約二十人の村人の多くはクイ族という少数民族、大きな目が印象的だ。彼らの多くは木から船の底の塗装用の樹脂を採取して、生計を立てている。

しかし、この大切な生活の糧である樹脂の木も、国から与えられた森林伐採権を持つ企業の伐採の標的になっていく。道沿いには伐採されて加工工場へ運ばれるのを待つ多くの丸木が横たわっている。この地域で伐採権を持つ企業の一つは、日本企業が出資する合弁会社である。

この地域での伐採は九七年頃から始まった。〇一年に政府が外貨獲得のために「家族規模ゴム栽培計画」を発表した後、

トゥムリンはその赤土の土壌からプランテーション用地に指定され、森林伐採は加速し、跡地にゴム農園がつくられている。村人はこの計画に協力するよう強要されるが、九割は反対している。森が伐採されてから村人の収入は半減、なかには収入を無くした人もいる。村人は共有林管理組合を立ち上げ、森を守るために活動しているが、企業から脅迫を受けているという。朝起きると、昨日まであった森林が消えていることもあるそうだ。村人の生活は物心両面から脅かされている。

現在、このトゥムリンでは、RPF(農村貧困家庭のための開発団体)という地元NGOが村に入り活動している。またカンボジアのNGOフォーラムは、RPFと協力し、村人に自分たちの権利を知ってもらい、役人も交えたセミナーを行なうことで共同体を支援している。弱い立場の人たちが、自分たちの権利を守るために立ち上がる勇氣と手段を得られるよう協力し、また事実関係を広く社会に知らせることで彼らの後ろ盾となることは、NGOの大切な役割だと思ふ。

(カンボジア事務所インターン)

message from the field



プロジェクトの現場から

写真：イラクの人々が笑顔で暮らせるようになるのはいつになるのだろうか (調査で訪れたバスラにて撮影)

イラク

戦争のなかにも 人々の暮らしが

原文次郎

今年の二、五月、イラク攻撃の時期にアメリカに滞在していた私にとって、イラクの現場を見ることは、テレビを通して見ているイメージを改めることから始まりました。アメリカで、メディアを通して見ていたイラクは、まるで戦争ゲームの様で、そこに暮らす人々がいるという実感に乏しいものでした。七月に実際にバグダッドに来てみると、とにかく暑い。日中は五十度を超えます。ホテルのロビーでも三十六度。この暑さひとつをとっても、とてもブラウン管を通しては実感できないことでした。

しかし、その暑さのなかでも人々の生活がありました。メディアでは、戦争で壊された建物の姿やサダム・フセインの像を倒す人々を映す方が「絵にな

る」のでしょうか、私が気になったのは、この暑さのなかで普通の生活を営む人々のことでした。電気が来ない、衛生的な水を飲めないというのは、バグダッドでは普通のことになっています。

家族もおらず、泊まる家も無く、その日その日を街頭で暮らしているストリートチルドレンの姿も見かけます。

小児ガン病棟を持つ病院へ行けば、献身的な努力を重ねている医師の姿に頭が下がりますが、肝心の患者さんは、エアコンなど望むべくもない部屋なかでぐったりしている始末。そのような姿を目にする一方で、十月から始まる学校の新学期を楽しみにしている子どもたちの姿を見かけて、救われた気分にもなりました。

最近(八、九月)の治安悪化の状況は人道支援の活動を難しくしています。しかし、それでも私がここに踏みとどまるのは、これらの人々の喜ぶ顔を見たいという単純な理由からです。(イラク調整員)

スタッフのひとりごと

ベトナムの愛嬌にはまって

ハノイ事務所 伊能まゆ

ベトナムの首都ハノイでは、今年の12月に第22回SEAGAMES(東南アジアスポーツ大会)が開催される。現在、ハノイの街中はどこに行ってもイメージキャラクターの「牛(Trâu Vàng)」が溢れ、ワールドカップが日韓で共同開催された時のように、ベトナムは期待と熱狂に包まれている。

先日、SEAGAMESのメイン会場の落成式を見学しに行った。ハノイの中心部から10キロほど離れたミーディン(My Dinh)競技場は「現代化、工業化を進めるベトナムらしく、水牛がゆったりと歩く田園風景のなかにぽつんと建っている。

会場に到着し、まずはバイクを駐輪場に預けようとしたところ、たく

さんの人がどっと駐輪場の入口に殺到。大河が狭い河口に注ぐかのような勢いだ。相変わらず「並ばない人々」である。

必死の思いでバイクを預け、ようやく会場に辿り着いて、たまげた。会場の小さいこと！日本でなら県営運動場？…こんな小さい競技場でも国際大会を開くというベトナム人の揺るぎない自信(?)に妙に関心してしまった。

その落成式が始まる前には歌謡ショーも行なわれた。ホンニョンという歌唱力も人気も申し分のない女性シンガー。しかし、彼女は小柄なので「スポーツ大会にはふさわしくない」という理由でSEAGAMES開会式



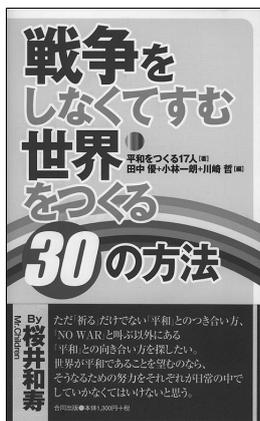
イラスト/かじの倫子

には出られないらしい。こういう感覚で、国際大会開催に向けて大真面目に議論がなされていると思うと、何だかほのぼのとする。

会場の外はうだるような暑さで、警備の公安も疲れ果てて道端に座り込んでいた。疲れたら、仕事よりも自分の身体、健康を第一に優先する。その素直さ(または無責任ともいう)に感心。やはり、嘘をつけない人々である。

『戦争をしなくてすむ世界をつくる30の方法』

みるよむきく



文・平和をつくる17人 編・田中優+小林一朗+川崎哲
合同出版 1300円+税

ピンク色の表紙にポップなデザイン。黄色の帯には「Mr.Chip」の「桜井和寿」の文字。若者を対象としていることは明白だ。「国際紛争? 私には関係ないよ。国連とか政府に任せておけばいいんじゃない?」地球は今どんどん狭くなっている。もう、皆、うすうす気がついているだろう。自分たちの生活そのものが、他の国との平和な共存なしには成り立たないということ。

「でも、私は政治家でもなんでもないしなあ」

そのとおり。普通の人には普通の生活しかできないものだ。だれもがマザー・テレサやネルソン・マンデラのように生きられるわけではない。でも、その普通の生活が、戦争を助長しているとしたら…? その後ろめたさと後味の悪さを解消すること

できるとしたら。普通の生活を激変させなくても、世界の問題を解決することにつながれたら。

この本に書いてある三十の方法は、最近の、戦争を必要と(あるいは肯定さえ)する風潮、戦争に否応なく突入してしまう流れをくいとめるためのものだ。戦争自体を一気に覆すような画期的な案が提示されているわけではないが、ちょっとしたことで戦争への流れを防ぐことはできる、と語りかける。そのなかには、世界の現状を訴えるものもあれば、普通の生活のなかで実践できる行動もある。

キーワードは、「自分で考え、自分でやる」、「やり方は人それぞれ」だ。これらの三十の方法も、本当に有効かどうかはやってみないとわからないが、かといってあきらめては何も始まらない。世界の大多数の人は、家族や友人が争いで傷つくことを望んではいないはずだ。それを考えれば、あなたなりの次の一案を考えつくこともできるのではないだろうか。次に起こるかもしれない戦争を防ぐために。

(会報誌レイアウト
/ システム管理 細野純也)

《開発協力》

THAILAND

タイ

地域の市場づくり

プロジェクトは四年目、第二フェーズ(〇三〇〇四年度)に入っているが、九月初旬、中間評価を行なった。地域の市場で販売する作物の全てを完全無農薬にするには、まだ時間を要するが、近くの町の郡役所で取り組む直売市場ができたことで、このまま継続していけば、借金の問題を解決できるという意見が出た。(松尾)

農村で学ぶインターンシップ

現在タイで学んでいるのは七期生(二名)と八期生(四名)。八期生は村に派遣されて二カ月が経ち、精神的に最もきつい時期である。言葉の問題はもちろんのこと、「何かしてあげたい」と思っていた自分がどんなに無力であるかを実感し、苦悩の日々をおくる。これが第一関門。村人は決して「助ける対象」ではないことを理解することは、活動をするうえで重要なポイントとなる。(森本)

北タイ調査

チェンマイ事務所は新規プロ

ジェクトの立ち上げを前提に北部国境地域フアーン川流域の調査をしていたが、プロジェクトは実施されないことになった。事務所は十二月いっぱい閉鎖する予定だが、これまで収集した情報をまとめ、調査対象地域の住民および現地NGOの今後の活動に資することができるように、報告会、地図づくりワークショップ、衛星画像の寄付などをこなす予定である。(木村)

CAMBODIA

カンボジア

持続的農業と農村開発(SARD)

高利貸しから借米しなくてもすむようにする村の助け合い活動「コメ銀行」では、前年の作柄が通常ならば八月に米倉を開いて貸し出しをする。今年は、昨年の干ばつにもかかわらず、通常通り八月に米倉を開く村が多かった。これは、昨年各コメ銀行が不作を見込んで貸し出しをギリギリまで遅らせたことが功を奏したようだ。

複合農業に関心ある農民に苗木と稚魚が配布された。(余部)

資料・情報センター(TRC)

図書館の活動は、事務所の移転に伴い書籍の貸し出しを一時中断し、荷造りなどの準備に追

われている。(余部)

技術学校

プノンペンとシアヌークビル両校の自動車修理コースと溶接コースの卒業試験も終了、就職先が決まっていらない卒業生はプノンペンの整備工場で研修中。両整備工場とも新しいパンフレットを作成し、営業に力を入れた。シアヌークビル工場は、運輸局長のもと、経営改善に努めている。(米倉)

調査研究・政策提言

トンレサップ湖の自然資源管理の活動では、漁業共同体の実務に役立つ小冊子の草案を執筆中。漁業共同体問題についてカンボジアNGO「CEDAC」とコンポンチュナン県を中心に調査を行なう計画を立てた。土地調査は、総選挙が終わり、カンダール県での調査を再開した。(米倉)

LAOS

ラオス

自然農業と農村開発(ビエンチャン)

ナトン村から、JVCが支援した耕運機を売り、新しい活動としてコメ銀行・牛銀行を始めたいという申し出があった。耕運機は共同農園で収穫したバナナを市場に持っていくために支

援されたが、現在、耕運機を持つ人は増え、町から仲買人が買付けに来るようにもなり、必要なくなってきた。(川合)

森林保全と自然農業(カムアン)

共有林づくりを支援した村で、外部者の土地利用が相次いでいる。プンフォアナタイ村では、畜産施設を建設したい企業が村に承認を求めてきたが、村人がこの申し出を拒否した。一方で、郡長が村人の了承なしにこの土地利用を許可していたことが明るみにでた。現在県や郡の関係者で話し合っている。

土地・森林委譲により、森林は村の共有林として法的に担保されるが、個別のケースを見るとこの村のように、村人の森林利用権が確立されているとは言いがたい。(中村)

VIETNAM

ベトナム

ハノイ事務所

日本の合鴨水稲同時作をベトナムに紹介してから十年。そこで、合鴨水稲同時作の専門家を招き、普及の状況や問題等について各地の実践世帯や関係者との意見交換を行なった。ソラ省やバクカン省では環境への配慮、労働力の軽減、そして現金

収入源の確保という点から、この農法を今後も続けていきたいという声が多く聞かれた。また、ハイフォン市ではこの農法がしっかりと根付いており、さらに発展させたいという意見が出された。(伊能)

農村開発(ホアビン)

今年三月には郡人民委員会からなるプロジェクト管理委員会を設立した。この委員会のメンバーを対象に参加型農村開発についての理解を深めることを目的として、八月に中部の古都フエを訪れ、ノルウエーのNGOが実施している参加型農村開発プロジェクトを訪問、経験交流を実施した。(伊能)

自然資源管理(ソラ)

住民自身による自然資源管理の活動を支援しているコマ村で、唯一学校がなく、生活用水の確保が特に困難であるコゲB集落で、八〇九月に簡易学校建設と水場整備の工事が行なわれた。住民が主体となって作業は進められ、JVCは資材の一部を提供した。子どもたちの識字率向上と生活改善が期待される。また、九月にはJVCが養成した獣医ボランティアにより、家禽・豚等へのワクチン接種がコマ村の全集落で実施された。(田村)

南アフリカ

農村開発

環境を保全しながら食料生産の向上をめざす自然農業を実践。植林に適する七、九月に果樹(桃、アプリコット、洋ナシ、りんごなど)と防風林の植林を行なった。JVCは苗木の共同購入のアレンジ、運搬に協力。今年の冬は雨が非常に少なく乾燥しており、山火事も多かった。水が涸れ、野菜栽培は難しいが、小麦、オーツなどを植えている。

また、当地で持続可能な農業に取り組み十団体が集まり、情報交換を行なった。今後、伝統品種の保存や農民が学びあう研修を協力・実施する。(津山)

子どもの教育支援

ジョハネスバーク市郊外の貧困地区でデボホ障害児ホームを支援。八月よりボランティアの山口聖子(せいこ)がデボホに住み込み、学習プログラムを実施。障害が比較的軽い子どもたちは、工作、絵、数字遊び、音楽などにいきいきと取り組んでいる。今後は学習やりこみについて支援を充実させていく。(津山)

調査研究・政策提言

TICAD III (東京アフリカ開

発会議・十四ページ参照)に向けてNGOの提言をまとめるために、アフリカのNGOを代表する十人を招き、八月に東京でシンポジウムを開催した。(津山)

《緊急対応》

IRAQ・JORDAN

イラク・ヨルダン

緊急支援

七月十六日に、イラク調整員として原文次郎が現地へ赴任した。八月十九日にはバグダッド国連本部ビルが爆破。直後の二十一日、熊岡代表も応援に駆けつけ、国連施設を吊問した。

当初予定していたストリートチルドレンの支援や、最貧地区であるハイ・タリク地区への給水や医療支援は、見合わせざるをえなくなった。

戦前から支援をしていたマン・スール教育病院への、薬保存用の冷蔵庫、薬品や機材の緊急支援を継続している。

現在、これに加えて白血病の薬を、バグダッドとバスラの病院へ支援する準備を行なっている。(佐藤)

ヨルダンでのイラク難民支援

ヨルダンの難民キャンプ、あ

るいは国境の無人地帯でテント生活を送っているパレスチナ人やスーダン人、ソマリア人。水・食糧など最低限の必需品は、UNHCRに供給されているが、砂漠の真中で、外部との接触を断たれた人たちの憤りは日に増しに激しくなってきた。

八月十二日にはCAREインターナショナルに協力して、子ども用の図書館を立ち上げた。九月からは、週三日の割合で、子どもたちのワークショップを行なっている。(佐藤)

イラク難民妊産婦支援

四月からイラク人妊産婦を緊急支援。カウンセリングや家庭訪問の結果、多くの妊婦が、母国の紛争から身体的・精神的に大きな影響を受けていることがわかった。四、七月、イラク人のほかヨルダン人、パレスチナ人などの妊産婦に五十九件のカウンセリング、三十九件のお産費用の支援を行なった。(佐藤)

PALESTINE

パレスチナ

難民キャンプ平和図書館(ベツレヘム)

ベイトジブリンの文化センターで、七月六日から開始した「子どもたちのためのサマープ

rogram」は大盛況のうちに八月末に終了。現在はその様子などを載せた子どもマガジンの編集作業中。

九月にはパレスチナボランティアチームの橘さんと藤屋さんが来訪。すでに常連の二人は子どもたちから大歓迎を受け、童話や日本の歌も披露した。

センターでは刺繍ワークショップも試験的に開始。パレスチナの伝統工芸である刺繍を製品化・販売することで、貧困家庭の収入増を目指す。(小林)

幼稚園児栄養改善(ガザ)

これは、今年春に開始した幼稚園児を対象に一日一パックのミルクを配る「ミルクプロジェクト」の発展版。栄養強化ビスケットを加え、保育士や母親たちに対する栄養教育も盛り込み、全般的な栄養改善を視野に入れている。六つの幼稚園・約六百人の園児が対象。期間は九月十五日から六カ月間。(小林)

AFGHANISTAN

アフガニスタン

東部地域医療支援

今年度に入り、保健省所管の地方クリニックと女性医療従事者養成コースを支援するべく、地方の保健局と話し合いを重ね

てきた。だが、ここに来て中央政府の保健省が一括して援助の調整を行なう方向に動き始め、JVCは交渉の一からのやり直しを迫られた。現在、保健省と交渉中である。(蜂須賀)

シギ高等女学校支援

シギ村にある女学校の校舎増設を支援。この学校は現在五百人余りの生徒が教室不足のため家庭で授業を受けることを余儀なくされている。地域住民の参加や教育省との十分な話し合いのうえ、校舎の増設を実施する予定。(谷山)

KOREA

コリア

「KOREA」子どもキャンペーン」による食糧支援は、SARSの影響により延期されていたが、八月末に実現した。昨年十一月に訪問した東海岸の水害被災地・江原道安邊郡の子ども施設に中国米五十トンを支援。現地を訪れて配給先となる幼稚園、託児所を視察した。

この八月末の訪朝時には、平壤のルンラ小学校で、子どもたちの絵画展も開催された(六七ページ参照)。(寺西)

幼かった頃の私に

出会えたイサーン

〈東京〉 小笠原 友紀子

八月末、タイのスタディーツアーに参加した。東北地方出身のためか、初めて見るタイの東北地方、「イサーン」の風景に懐かしさと安堵感を覚えた。また、目を見張る草木の大きさ、田んぼの広さに気候の違いを感じた。宿泊させていただいた村は、文化の差こそあれ、まさに子ども時代に過ごした姿であり、木の実に見上げていたら、「食べていいよ」とその木の持ち主であるおじさんが声をかけてくれた。

私が生まれ育ったところは農業で生計を立てている家が

■ツアーで訪れた農村にて



国内ひろば

JVC network

多かったが、そうでなくても全ての人が家の横や、少し離れたところに田や畑、林を持っており、日々の暮らしに必要なほとんどの食料はそこで賄っていた。食料や日用品を買うような店はなく、その他の必要なものは、週に一回の町の朝市や、隣の市の店へと出かけて行き購入していた。そして庭には、柿、グミ、スグリ等、季節ごとの木の实があり、小腹が空くと、それらや畑のキュウリやイチゴを採って食べた。学校の行き帰りや友達と遊んでいるときに、農作業をしているおじさんが、「そ

の辺のイチゴ食べていいよ」と言ってくれ、小川で洗って食べた。そんなことが懐かしく思い出された。

町にスーパーができ、車が增え、朝市はいつの間になくなった。イチゴは大切な商品となり、通りすがりの子どもにあげる人もいなくなった。風景の変化の比ではなく、その中身の変化は大きい。子どもながら、ある種の便利さと引き換えに、その裏で失われていく物事、奪われていく自由の入れ替わりの速さに恐ろしさを覚え、窮屈さを感じた。今、その気持ちは、便利さや目新しさに覆い隠されて、無意識にそれを当然と受け入れ、何事もないように生活している自分がある。日々の暮らしのなかで、時折胸を刺す窮屈感や不自由さは、奪われた自由の大きさではなく、奪われたと感じる、生きていく力のない、自分自身の問題であることを痛感した。多くを思い出すきっかけと、考え、悩み、自分を見つめ直す時間をくれた素晴らしいツアーであった。

イベント報告

第三回東京

アフリカ開発会議

九月二十九日、十月一日/東京

新聞などで報道された通り、アフリカ開発のあり方を話し合う東京アフリカ開発会議（TICAD）の第三回会議が開かれました。JVCは九三年の第一回以来、アフリカを中心に日本、欧米のNGOと協力して毎回政策提言活動を行なってきましたが、今回は日本のNGOや市民の有志で結成したネットワーク「ACT 二〇〇三（TICADのための市民行動）」と協力して、津山（南アフリカ事務所代表、原田（東京事務所・南アフリカ事業担当）、壽賀（同総務担当）が活動を行いました。

第一回会議では認められなかったNGOの参加が、今回は事前の準備会も含めてオブザーバー参加が認められるまでに進展しました。JVCも、実績あるアフリカNGOの招聘を働きかける一方で、津山が南部アフリカ準備会合に出席するなど、準備段階か

ら積極的にかかりました。八月にアフリカのNGO九団体を招いて開催したシンポジウムでは、紛争予防・農業・エイズなどについて多岐に渡る提言が出されたほか、JVCを含む本会議参加NGOからも補足的提言が出されました。残念ながら本会議はほとんど議論のない形式的なもので、過去十年間の評価も活かされず、最終文書も以前と同様、NGOに「foggy（霧のような）」と評されるような具体性のないものでした。しかしNGO側では、今後もフォローアップにおける市民社会の参加促進を働きかけていきます。

（総務担当 壽賀 一仁）



■ 8月のシンポジウム参加者

※「ACT 二〇〇三」に関する詳細については、<http://www.act2003.org/> をご覧ください。

募金にご協力ありがとうございます

JVCの活動は、皆さまの募金に支えられています。

① JVC 募金

JVCの各国での活動に役立てられます。募金先をご指定いただくこともできます。

口座番号：00190-9-27495

加入者名：JVC 東京事務所

7月計 **3,862,461 円**

8月計 **970,112 円**

	7月	8月
無指定	426,442 円	271,471 円
タイ	0 円	97,503 円
カンボジア	62,000 円	200,000 円
ラオス	6,000 円	1,000 円
ベトナム	1,000 円	1,000 円
南アフリカ	50,000 円	60,000 円
パレスチナ	78,897 円	6,000 円
アフガニスタン	1,019,225 円	101,000 円
北朝鮮	42,000 円	3,000 円
イラク	2,176,897 円	228,868 円

② 犬養道子「みどり一本」募金

この募金は JVC 活動地での植林プロジェクトに使われます。

口座番号：00100-8-212497

加入者名：犬養道子「みどり一本」

7月計 **279,500 円 / 48 名**

8月計 **289,646 円 / 40 名**

③ JVC サポート募金

銀行や郵便局の口座からの自動引き落としやクレジットカードを利用する手軽な募金方法です。

7月計 **124,000 円 / 78 名**

8月計 **148,000 円 / 77 名**

編集後記

「世界は悪くなってきている…」危機感を持つことは大切だ。ただ、2000年前から「今の若いモンは…」というセリフがあった(らしい)ことを考えれば、人類はそれほど進歩していないのかも。であれば、過去の歴史から学べることもあるだろう。そもそも、「bestな世界」など空想(妄想?)でしかないと思う。でも、「今日よりほんのちょっとbetterな世界」なら、どうだろう? / 本号よりレイアウトを変更してみました。御意見お待ちしております。(H)

新スタッフ紹介

原文次郎(はらぶんじろう)

イラク調整員



調整員として七月よりバグダッドに駐在しています。今年の一月まで十六年間勤めていた電機メーカーからの転身です。

私にとっては念願の仕事で、人道支援の現場で張り切っています。初めての現場がイラクということで戸惑いつつも、手応えのある任務を与えてくれた JVC に感謝しています。

中島謙一郎

(なかしまけんいちろう)

イラク・ヨルダン調整員補佐



九月末からヨルダン及びイラクで活動を始めました。今年の五月から三カ月間は、同地にて映画監督の A・D として働いていました。その時に会ったストリートチルドレンの純粋で素敵な笑顔が忘れられません。彼らや他のイラク人、ヨルダン人に再会する機会を与えられ感謝しています。現地の市民及び日本の支援者の方々の思いを大切に頑張ります。

カンボジアはなんといいってもお米がおいしく、日本食にもよく合います。数年おきに氾濫するメコン河が豊かな大地を支えているのです。果たして、プノンペンでの寂しい一人暮らしでも、自炊に励むことになるのでしょうか?

山崎勝(やまざきまさる)

カンボジア事務所

／農村開発



私はこれまででも三年ほどカンボジアの農村

での活動に携わってきましたが、そこに生きる人々から多くのことを学びました。カンボジアはなんといいってもお米がおいしく、日本食にもよく合います。数年おきに氾濫するメコン河が豊かな大地を支えているのです。果たして、プノンペンでの寂しい一人暮らしでも、自炊に励むことになるのでしょうか?

夏募金にご協力くださり、ありがとうございます。

JVCの活動は、皆さまからの募金に支えられています。この夏には、多くの方々から合計約一千万円のご支援をいただきました。お寄せいただいた募金は、イラクでの医療支援(バクダッドの子ども病院、ストリートチルドレン・難民の子ども支援をはじめ、アジア・アフリカでの活動に有益に使わせていただきます。二〇〇二年度実績一七%)



■現地の医師と、JVCが寄付したガラス張りの薬品用冷蔵庫

2003年度 夏募金集計

¥10,556,138 / 1,561名

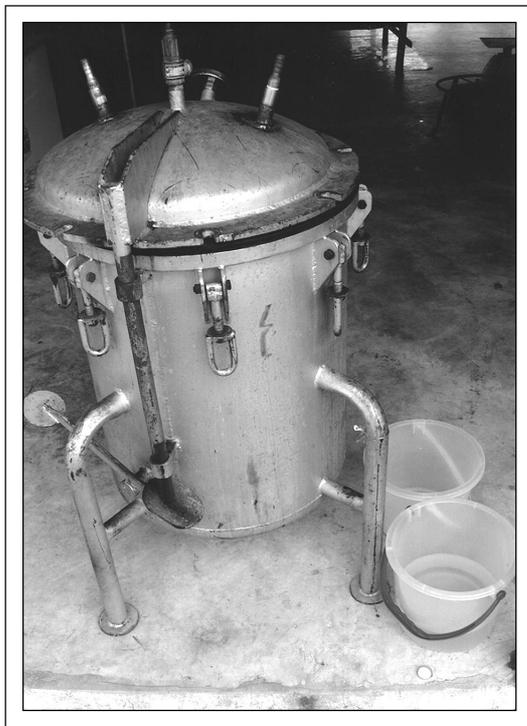
うち、「イラク」指定：¥1,749,103

暮らしを彩る道具

LIFEWORk ITEMS

65

Thailand



ドブロクの火入れ

地域でつくっているドブロクを瓶詰めする前に、加熱処理して微生物を殺菌するための器具 (コンケンにて)



日本国際ボランティアセンター (Japan International Volunteer Center) は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられているアジアやアフリカ・中東の人々に協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉で、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

■ JVCでは会員を募集しています。

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年7回この会報をお届けします。

- ◎一般会員 10,000円
 - ◎学生会員 5,000円
 - ◎団体会員 30,000円
- ※それぞれに正会員と賛助会員があります。

入会のお申し込み、会員の方のメールマガジンのお申し込み、住所変更などはこちら (会員担当) へ。

ikuko-n@jca.apc.org

会員数 (10月1日現在) 合計 1,432人
(正会員 568人 賛助会員 864人)

■ オリエンテーション(説明会)へどうぞ。

JVCの活動内容をご紹介します。お気軽にご参加ください。(無料・予約不要です)

- 第1月曜日 午後7:00 - 8:30
 - 第2・第4土曜日 午後2:00 - 3:30
- ※会場はJVC東京事務所です。

■ E-mail

jvc@jca.apc.org

■ URL (ホームページ)

http://www1.jca.apc.org/jvc/

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。
※本誌は再生紙を使用しています。